

伝え

発行 日本口承文芸学会

〒150 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大学文学部 伝承文学研究室内
☎03-5466-0224

地域で「語り」を掘る

武田 正

柳田国男の『遠野物語』と柳田にそれを語った佐々木喜善の物語の格差が、ようやく問題になりはじめています。赤坂憲雄をはじめ、識者の中から『遠野物語』は柳田が佐々木から耳にした話をもとにして描いた、柳田の自己完結的作品だったのではないかという意見である。東北に生れ育ったわたくし自身、どこかに柳田が『遠野物語』で抱いた東北との違和感から、民俗学の出発点としての作品としてよりも、文学作品として読んできたように思うのである。

柳田は民俗研究の段階を、旅人としての採集から寄寓者としての採集、そして同郷人としての採集によって、民俗を支え伝承してきた生活意識までを理解できると言ったが、昔話について見れば、従来収集された膨大な資料の渦の中で、モチーフ・話型の分析、比較に追われてきたということであろうか。

『日本昔話大成』『日本昔話通観』の完結によって、関敬吾が示唆したように、一つは周辺諸国のそれとの比較研究によって、昔話が育ってきた、その背後のものを明らかにして行くことであるが、韓国なり中国の資料整理が着実に進んでいることは、慶賀すべきことである。そし

て二つには、昔話が語り合う共同体の中での意味をさぐることであるというが、この面での研究は必ずしも進展しているとは言えないうらみがある。

豊かな昔話の世界を伝承して行くことの重要性は、変りないばかりか、以前にも増して認識され出しているが、語りを取り込んで維持されてきた共同体の変質もまた極めて大きい。都市に人口が集中すると同時に、都市化現象は日本の隅々にまで見られるようになって、情報を伝達するためのメディアが大きく変わったこともそうであるが、共同体を維持するために未来を荷担う子どもたちが、各家々の中に囲い込まれてしまい、子ども集団が消滅しかかってもいる。技術、知識が最優先され、それを追うことが生活そのものになってきている。かつての民俗社会での「群の教育」の一つとしての昔話の語りは、すでになくなってしまったようにさえ見える。なのに、昔話の語りへの要求が高まってきているのは、リュウティが『昔話と伝説』で言う「人間の魂の根源的欲求」に応えるのが昔話だからであろう。まだ語りが生きている地域で語りを掘り起す研究は、昔話の語りの生成、昔話の意味をさぐるためにも続けねばならない。
(山形県)

研究例会報告

間宮史子

昨年10月28日の研究例会では、海外の研究動向に関して二つの発表があった。まず、法橋量氏は「ドイツ民俗学における世間話研究の現状」について報告した。

法橋氏は、ドイツ民俗学における「日常の語り」（バウジンガーが導入した述語で日本の「世間話」にほぼ対応する）の定義とその形態（現代伝説／現代の笑い話、逸話／伝記的語り／うわさ／ゴシップ／新聞伝説）を説明し、リンディヒによる民間説話と日常の語りの対比を表示して、両者の違いを明らかにした。また、日常の語りにおいては、同じ話でも聞き手の受容の仕方によってその意味が変わること、聞き手が次には語り手になりうるということがモデル図で示された。

「平均的な人々による生活、体験に基づく語り」、そのような語りのコンテクスト及び機能の研究として、次に紹介されたのは、レーマンによる「ライフヒストリー」研究、特に捕虜収容所における語りである。特殊な状況下で人々が語ったのは、初期には食物の料理法、郵便物が届くようになると家族、というように環境の変化に従って内容も変わった。収容所内の語りの共同体は、伝統的なそれと類似しており、上手な語り手によるファンタジー性の強い話が娯楽として語られもした。極限状況下では、話が真実であるかどうかは問われない。それならば、昔話が語られた可能性も大いにあるのではないか、という指摘が質疑応答でなされた。また、学者は解放後の学会への復帰を考えて、自分たちの知識を思い出すために語ったという。これは、記憶力のトレーニングとしての語りである。

ドイツでは、兵隊や戦争体験の語りに対する態度に、第一次大戦世代と第二次大戦世代との間で違いがあるという。つまり、前者は積極的に体験を語ったが、後者はその逆である。日本でも、戦争体験を語り伝える人々がいる一方で、「語らない」人々も存在することが例会終了後の懇談会で話題にされた。「語る」ことが人間の行為なら、「語らない」こともまた、人間の一つの行為である。「語る」ということを追究していくためには、その裏返し「語らない」ことも無視することはできないだろう。

日常の語りをジャンル化、分類しようとする際に生じる問題点、「語らない」現象など法橋氏の報告は、現代の世間話研究にいくつかの重要な手がかりを与えてくれた。

かわって、三原幸久氏の発表は「ラテンアメリカにおける口承説話のクレオール化」についてである。はじめに三原氏は、ピジン（誰にとっても母語でないある種の補助接触言語）とクレオール（かつてピジンであって、後に母語となった言語）の定義を述べ、中南米の種々なクレオール言語を説明した後、クレオール地域で収集された口承説話の記録があるものは実物を示して紹介した。大部分は、アメリカ人研究者によるものである。

中南米の口承説話の状態をヨーロッパの説話との関係で見ると、次の四段階に分けられるという。A（先住民型）昔話を欠き、神話・伝説のみ土着のものが存在。B（先住民・イベリア混合型）昔話のみスペイン・ポルトガルのもを受容し、神話・伝説は土着の要素を残す。C（クリオージュ・メスティーズ型）口承説話全体にわたってスペイン・ポルトガルのもを受容。D（黒人クレオール型）昔話はスペイン・ポルトガルのもを完全に受容し、神話・伝説がほとんどない。この段階は、共時的（地域差）であると同時に通時的でもある。昔話は受容するが、神話・伝説は受容しないということがいえるのだろうか。

これらを踏まえて三原氏は、口承説話のクレオール化として、その地域固有の伝承による説話の欠如、神話・伝説の欠如、スペイン・ポルトガルの昔話を変形して伝承、動物昔話・笑話の伝承がより濃厚、話の主人公に現れる出身地の影響、を指摘した。中南米のように広汎に、征服文化と被征服文化が接触した所では、ことばと同時にそのことばを介して伝えられる話もまた変化していくのがわかる。

中南米のクレオール地域では、今でも通夜の席や戸外での日没時に民間説話が語られているという。世間話もクレオール化されているのかということが、今後の調査研究の問題としてあげられた。

(東京都)

大林太良氏朝日賞受賞

日本口承文芸学会の創立発起人の一人である大林太良氏が、1月22日に1996年度の朝日賞(朝日新聞文化財団)を受賞されました。「日本民族文化の形成に関する卓越した研究」が受賞の理由です。40数年にわたる日本とアジア諸国との比較研究が社会的に高く評価されたことを、同じ学会員としてともに喜びたいと思います。新年のうれしいニュースでしたので、ご紹介しました。

第31回研究例会のご案内

日時 1996年3月16日(土) 午後2時～5時
場所 中央大学駿河台記念館
発表 鈴木昭英氏
「瞽女仲間と瞽女唄伝承」

第20回大会のお知らせ

今回は20回の記念大会となります。日程・場所を早めにお知らせいたします。尚、日程と場所以外は予定です。

日程 1996年6月1日(土) 午後 / 6月2日(日) 午前・午後
場所 國學院大学たまプラーザキャンパス
(神奈川県横浜市青葉区 / 東急新玉川線・たまプラーザ駅下車)
公開講演 大林太良氏・徳江元正氏(予定)
シボシム 「柳田国男から関敬吾へー口承文芸研究の流れー」(仮題)
特別企画 昔話伝承者による語り
白幡ミヨシさん(岩手県遠野市)
蒲原タツエさん(佐賀県藤津郡)

事務局報告

受贈書リストは休載
いたします
秋の号に掲載予定です

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円 年会費 4000円

入会申し込み書請求先: ☎150東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 ☎03-5466-0224

送金先: [郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆編集担当は、大島広志・中川裕・中村とも子です。